

## 子どもと出会う(12)

# お母さんとの別れ

岩田 純一

春は、卒園と入園式が背中合わせの特別な季節である。そこでは別れと新たな出会いが同時にスタートする。初めて保育所や幼稚園に入園してくる子どもは、家庭とはまったく違う環境に適応していかなければならない。とくに保育所の一歳児は、入所初期の母親との強い分離不安から、泣き叫ぶ、母親の後を追うといった行動がよく見られる。三年保育で入園してくる幼稚園の三歳児であっても、入園当初にはやはり強い分離への不安が子どもによっては見られる。さすがに二年保育から入園

する子どもには、そのような行動はあまりないものの、入園当初の不安や緊張を示すことには変わらない。

ある公立幼稚園で三歳児を担当された中西昌子さんは、入園の初期、園での母子の別れに関する保育記録を丹念にとっている。それらの実践記録は、子どもがどのように母親から離れ、園という場にじぶんの居場所を作っていくのかといったことを考えさせてくれる。そこで、彼女の実践事例をもとに筆者なりの視点から考察してみたい。

## 心をつなぐ物

入園後二三日、かつやは母親の背中に隠れて登園する。母親には「帰ったらいや」と言い、母親も園に一緒にしているとそのそばで安定して遊ぶが、帰ろうとすると大泣きして母親を追いかける。

### ◇エピソード1「先生、明日も電車ごっこしよな」

五月一日(木)

この日もわーわーと泣くかつやをひざにのせて、園庭のイスに座りながら、いろいろな子どものやりとりを楽しんでいると、かけるが木のつるを持つてくる。私「かけるくん、これなあに？」と聞くと首をかしげるかける。私「これ、へびちゃうか？ ほら、ここ、顔みたい」などと話していると、ひざの上のかつやが泣きやんで話を聞いている。私「夜になったら、にゅるにゅるってへびになるのちがう？」「かけるくん、持つて帰ってみたら？」と言うと、首を横に振

る。私「先生、持つて帰ってみよかな？」と言うと、かつや「かつちゃん、持つて帰る」と言う。私「かつちゃん、ほな、そーっとカバンに入れとき」と言う。かつやはカバンに入れて保育室に戻る。

その後、かつや「電車ごっこしよ」と誘いにくる。駅に見立てた平均台の上に座りながら、私「はっぱの切符ですよ。どこにでも行けます。いつてらっしゃい」と送り出す。駅に戻ってくると、私「次は、どこへ行きますか？」。かつや「動物園にいきます」。私「いつてらっしゃい」とたわいないやりとりを楽しむ。そして、帰り際、かつや「先生、明日も電車ごっこしよな」と言うので、私「うん、しよなあ」と返す。

夜になったら蛇になるかもしれないという木のつるを、先生の「持つて帰る？」の誘いに、じぶんのカバンに入れる。その後、先生との電車ごっこを楽しんだあと帰り際に、じぶんから「先生、明日も電車ごっこしよ

な」と約束を交している。

◇エピソード2「もう、泣かへんで、ずっと泣かへんで」

五月二日（金）

かつや、母にくつついて登園。私「蛇になったか？」と聞く。かつや「ううん」。私「そうか、残念。一回おとうさんにでも、夜じゅう起きて見てもらおうか？」など話す。その後、しばらくして見ると、母がいない。私「あれ？」と言うと、かつや「帰っていいって言ったよ。もう泣かへんで。ずっと泣かへんで」と言う。私「そう、かつちゃん、えらいね」と言う。

その後、昨日の続きをする約束だったので、電車ごっこをする。昨日、はっぱの切符にしたら、そこらじゅうのはっぱをむしってきた子どもがいたので、石を切符にする。昨日と同じように、駅に戻ってきては、新しい切符を渡し、送り出す。行き先を考え、保育者に伝えることを楽しみ、そのうち、石の切符を後

ろにのせ、落とさないように走ったりする遊びに変えたりして楽しむ。かつや「先生、持って帰る」と言うので、石の切符を入れる袋を渡す。リュックに入れて持って帰る。

つぎの日（エピソード2）、母親が帰っても泣かない。かつやは先生に「帰っていいって言ったよ。もう泣かへんで。ずっと泣かへんで」と言う。この表現には、お母さんと離れても我慢できるじぶんの自負、心と別れる不安の葛藤がよく表れている。先生は「かつちゃん、えらいね」とほめる。そのあと、昨日の約束通りに電車ごっこをする。そのなかで石を切符に見立てて遊ぶ。遊びを楽しむんだあと、「先生、持って帰る」と石の切符をリュックに入れて家に持って帰る。

◇エピソード3「石の切符を手を持ちながら」

五月六日（火）

せつかくつながりかけたかな？ と思ったら、三連

休。あまり期待せずに迎える。背中に隠れてなかなか、シールを貼りにこないかつやを連れて「元にもどってしまったようで……」という母。私「かつちゃん、どれがいい？ これ？ うん、先生ベツタンしとくね」とかつやの代わりにシールをはる。登園の遅い子どもたちを待つてかかわり、その後、ふと園庭を見ると、母親と別れ、あの袋に入ったままの石の切符を持ちながら、三輪車に乗っている。うれしかった。この日も「ずっと泣かへんで」と言っていた。

しかし三連休の直後（エピソード3）は、元に戻ってしまったかのように最初は母親から離れ難い様子である。母親の背中に隠れている。先生が代わりに登園シールをはるが、かつやをふとみると、母親と別れ、先日の石の切符を手にもちながら三輪車に乗っている。この日も、じぶんに言い聞かせるように「ずっと泣かへんで」と言っていた。

これら一連のエピソードは何を示唆しているのである

うか。ここでは、遊んでいた（木の）つるや石を家に持って帰るといふ行為の意味を考えてみたい。園のなかの物を家庭にまで持ち帰るといふ行為は、それまでは家庭とは分離していた園という場が子どものなかで心理的につながってきたことを象徴的に意味する。つるや石はたんなる物にすぎないが、家と園を往復するなかで、その物（もの）が場と場をつなぐ事（こと）になったのである。北山（二〇〇四）によれば、日本語の「こと」は事と言の両方につながっているという。したがって、物は事のやりとり、すなわちノンバーバルコミュニケーション（非言語的交流）につながってくるのである。とくに石の切符の往復は象徴的でさえある。園と家庭という場の心理的交流が始まったのである。「あすも電車ごっこしよな」は、そのような心理的つながりの出現を示すものとして読み解くこともできる。園のなかの物が家庭と園を心理的につなぐ事（媒介）として成立し、保育者と子どもをつなぐ言のやりとりとなっても現れてくるのである。それは、子どもが園という場に居場所を感

じ、母親への別れ難さを乗り越えていくきっかけにもなってくる。「もう泣かへんで、ずっと泣かへんで」は、そのような乗り越えが自己の決意表明となって現れたのであろう。連休後には多少の退行（戻り）があつても、もはや母親に泣いてすがるといふことはない。そこに、じぶんのもう一つの居場所としての園が子どものなかに成立してくる様子をうかがわせる。もちろん、そのような過程のなかで、保育者がひざに座らせて安心させる、子どもを楽しい遊びに誘う、一人で居られたことを「えらい、よくしんぼうしたね」「えらい、つよくなったね」とほめてあげるといつた働きかけが大切な役割を果たしたことは言うまでもない。

### 見通しをもたせる

新入園児にとって園はまったく新しい環境であり、母親との一時的な別れはさらに気持ちに不安にさせる。やがて時間がきて母親が迎えに来るとしても、分離への不安が強いと、目の前の母親にしがみついて離れ難いので

ある。そのようなとき、子どもに時間的・空間的な見通しをもたせるようなことばかけは、不安に耐え、園という新たな場に居場所をみつげようとする子どもの気持を支えるきっかけになってくる。

### 魔法の望遠鏡

まずつぎのエピソードから、たくやという子どもを試みよう。

◇エピソード4 「魔法の望遠鏡」 五月十二日（月）

今日もなかなか母親から離れない。虫眼鏡風のブロックを望遠鏡に見立てて、私「これ魔法の望遠鏡です。どこからでも、たくちゃんが見えますから、お貸しします」と言つて母親に渡す。母親も突然のこととは言え、目にあてて、「ほんと、うれしい。借りて帰ります」と話にのってくれる。大好きな「怪獣探検」に出かけ、滑り台をすべってくる間に母親が帰る。戻つ



てきて、母親の姿が見えずに泣く。私「大丈夫。母さ  
ん見ててくれるよ。見にいこ」と言つて、もう一度  
二階に行く。私「あそこかな？ あの青い屋根の向こ  
う」と言うと、たくみ「ちがう。あっち」と本当に自  
分の家の方向を言う。そんなやりとりを一緒に探検し  
ながら聞いていたしんべいは、「お母さん、お空から  
見てくれるかなあ」と言う。彼もまた、母親から離  
れづらい子どもである。その後、保育者から離れ、仲  
良しの友達と遊び出す。降園時、母親に「この望遠鏡  
よく見えましたか？」と聞くと、予め、私が伝えてお  
いたように、母親「滑り台、楽しそうにしているのが  
見えました」とたくやの前で話してくれた。

母親から離れ難いたくやの前で、「どこからでも、た  
くちゃん見えますから、お貸しします」と、魔法の望遠  
鏡を母親に渡す。そのあと探検ごっここのすきになく  
なった母親に気づき、たくやは泣き出す。先生は「大丈  
夫。母さん見ててくれるよ、見にいこ」と誘う。

「あそこから見てはるやろ」「ちがう。あっち」とやり  
とりしていると、それを聞いていた、同じように母親か  
ら離れづらいしんべいが「お母さん、お空から見たく  
れるかなあ」と言う。そのあと落ち着き、保育者から離れ  
て仲良しの友達と遊び出す。

#### ◇エピソード5「もう泣かない」 五月十三日(火)

この日から、離れるときに、例の望遠鏡を持つてや  
りとりをするたくや母子の姿が見られるようになる。  
この日、やっぱり離れたくないたくやに、母「父さん  
も見えるように二つ借りて帰るね」と話している。そ  
んな様子を見ながら、抱っこして母親から離す。泣き  
ながら、たくや「先生がたくちゃん抱っこしたら、母  
さんが帰る」と泣いている。私「母さんはたくちゃん  
のお洋服洗濯しんなんやろ？ お掃除もせんなん。ご  
はんもつくらんなん。たくちゃんのおやつも買いに  
いかんなん」と抱きながら話す。私「母さん、お買い物  
行つて、望遠鏡でたくちゃん見て、泣いてたら悲しい

しどうしようって思わはると思うよ」と話す。すると、しばらくして「もう泣かない」と言って泣きやむ。そして、そばでやはり泣いているしんぺいに、たくや「お母さんは、たーちゃんのおやつ、お買いもん行つてはる。せんたくもしてはる」と諭している。

次の日（エピソード5）、やはり離れたくないたくやに母親は「お父さんも見えるように二つ借りて帰るね」と、ふたたび魔法の望遠鏡をもちだすがそれでも泣くと、先生は「お母さん、お買い物行つて、望遠鏡でたーちゃん見て、泣いたら悲しいしどうしようって思わはるわ」と話す。すると「もう泣かない」と泣き止む。やはりそばで泣いているしんぺいに、今度はたくやが「お母さんは、たーちゃんのおやつ、お買いもん行つてはる。せんたくもしてはる」と諭している。

三歳にもなると、子どもは心の中で母親を表象（イメージ）として思い描けるようになる。だからこそ母親が目の前にいなくとも、そのイメージを拠り所として母

親からしだいに分離していけるようになるのである。しかしながら、園というまったく新たな環境に入るとき、ふたたび分離への不安が高まり、それが母親との別れを難しくさせる。ここでは、母親がいつもどこからじぶんを見守り、じぶんのことを思ってくれているといった、保育者によるイメージ喚起が、子どもを安心させ、分離による不安を乗り越えさせていくきっかけとなっている。もちろん、魔法の望遠鏡にそのような力をもたせたのは、保育者と母親の協力・共犯的な連携が重要であつたことは言うまでもない。

#### 電話でつながる

くみの事例も、子どもに時間・空間的な見通しをもたせることの意義を示唆している。くみは母親を送つた園の女関先にじつとしている。他児がわかるがわるに来て「どうしたんや」「お母さん迎えに来はるしな」となぐさめる。それでもおさまらず「お母さんに電話して」と泣く。保育者が職員室へ連れていき、うそつこで電話を

かけるふりをする。保育者「お母さんまだ帰っていない

わ」というと受話器を貸せとまた泣く。保育者「子ども

は使えないの」、くみ「もう一回電話して」、保育者「く

みちゃん、電話貸してって怒るしいやや」、くみ「言わ

へんし、電話して」「すぐ来てって言って」、保育者は電

話をしているふりをして「お弁当食べた後にすぐ行きま

すって言うてはったよ」と伝える、といった一連のやり

とりがエピソードとしてみられた。ここでは電話の登場

であるが、右のような時間的な心づもりをもたせるよう

なことばかけが、しだいに母親の迎えまでは居場所を園

にきめるという覚悟をもたせていくのである。泣きなが

ら「お母さんに電話して」という、ともかずという子ども

の事例もそうであった。保育者が職員室の電話で「聞

こえますか？ お母さんに会いたいって。ええお願いします

ます」「ともちゃん、お母さんすぐに迎えに来るって。

待つてようね」と話すふりが、やがてお母さんが迎えに

来てくれるという心づもりを子どもに持たせたのであ

る。それが、そのあと保育者に「めめ、ふいて」と、じ

ぶんの気持ちの立て直しをもたらすのである。

そのように覚悟を決めたとき、子どもは初めて園のな

かにじぶんの活動の居場所をみつつけようとし始める。そ

れと並行するかのように、保育者との心理的なつながり

もしだいに形成され始める。それまで「先生、きらい」

と言っていたくみが、保育者の手をつなぎにくるとい

のはその現れとも言える。さらに母親が帰っていった門

のところへ保育者を一緒に誘うのもそうである。さら

に、午後からは「一緒に遊ぼ」と保育者を誘ってきたの

である。このような保育者との情緒的つながりが形成さ

れ始めると、逆に母親との別れがさらに容易になつてく

るのである。その二日後、五月二十九日のエピソードで

は、門まで母親を送り、その間に気持ちが落ち着き、

ちよつと泣いただけですぐ遊ぶことができた。六月四日

には「先生、ママとバイバイするからついてきて」と保

育者を誘い、ほんとうにいい顔でじぶんから母親にバイ

バイをしたという。このように、子どもはしだいに園を

じぶんの居場所とし、そこでの活動を先生や仲間と一緒に



にできるようになってくるのである。

### お互いを鏡として

母親と離れるタイミングをはずしたりかこが、帰ってしまつた母親に気づき大泣きしたときの事例をみてみよう。しんぺい（彼もまた毎日お母さんと離れづらく泣いている）が、赤ちゃんのように保育者に抱かれて泣き続けるりかこに気づき「どうしたの？」とたずねる。保育者は、「お母さんいなくなつて、泣いてはるねん。ごちそうたべさせてあげて」と、しんぺいに言う。しんぺいだけでなく、それをまねて他児も同じようにごっこのごちそうを運んでくれる。その間、保育者はりかこを抱っこしているが表情は硬い。保育者がしんぺいに、りかこを何か笑わせる方法はないかなどもちかけると、しんぺいは「なんでだろう、なんでだろう」と踊り出す。その様子をみて、りかこも大きな口をあけて笑い出す。しんぺいがりかこの口に葉をちぎつて砂に混ぜたごちそうをもつていくと、口をあけて食べるまねをする。保育者

は「わあ、うれしい。しんぺいちゃん、食べはつたな。元気でできたんや」と声をかける。そこへ同じマンションで仲良しのしんぺいが誘いにくると、すつと立つて、笑つて元気に走っていく。

この事例はもう一つの興味深い示唆を含んでいる。初めての幼稚園で母親と離れがたい子どもにとっては、分離への不安から同じように泣く仲間を見ることは、ちょうど他児にじぶんの不安な気持ちを映し出す鏡となるのである。保育者の「お母さんいなくなつて、泣いてはるねん」は、そのことを促す。しんぺいは、りかこにさつきまで泣いていたじぶんの姿を重ね合わせてみたのである。その意味から、泣いているりかこをなぐさめ、励ますことは、思い出すと泣き出しそうになるじぶん自身を同時に励ますことにもなるのである。それが、じぶんはあんならないように頑張ろうという形で、つい泣きそうになるじぶんの気持ちを立て直し、分離への不安な気持ちを乗り越えていくきっかけとなるように思える。

子どもは仲間のなかに身をおき、お互いの姿を合わせ

鏡とし、そのなかで自他が共感し、ときに励まし支え合  
いながら、そこで子どもたち相互が育ち合っていくこと  
になるのではなからうか。

### まとめ

園という新しい環境への移行は、新入園児にとっては  
乗り越えねばならない危機的な状況である。その証拠と  
して、入園当初には必ず何人かの子どもが母親からな  
なか離れることができない。入園当初に見られるそのよ  
うな分離への不安を示す子どもたちへの対処は、保育実  
践の大切な課題でもある。

分離への不安から泣く子ども、一時的に別れるけれ  
ど、お母さんはどこかですっとじぶんのことを見ていて  
くれる、しばらくしたらまた迎えに来てくれるといった  
時間・空間的な見通しを持たせるような言葉かけが子ど  
もの気持ちを落ち着かせる。もちろん、その際には子ど  
もの気持ちが落ち着くまで、保育者が子どもをひざの上  
に乗せたり、胸に抱えてなぐさめるといった守りの時間

や空間も必要になってくる。そのなかで、少しずつ子ど  
もと保育者の間に情緒的なつながりができてくる。子ど  
もは、その保育者を心理的な拠り所としながら、少しず  
つ保育者から離れても他児とかかわっていけるようにな  
ってくるのである。それは、園という場がしだいに子  
どもの活動の居場所となっていくことである。そのと  
き、保育者は楽しい遊びの場を提供し、そこに子どもた  
ちを誘っていくといった働きかけが重要になってくる。  
そのようにして、子どもはしだいに送ってきた母親に園  
の門で手をふって別れ、園での新しい生活ができるよう  
になってくるのである。

(京都教育大学)

### 参考資料

- 北山 修『幻滅論』みすず書房 二〇〇四  
中西昌子「心をつなぐ・つながりを広げる―三歳児の生活」  
京都市立伏見住吉幼稚園 自主研究発表資料 8―28頁 二〇

〇三

☆この連載は今回で終わります。